

drynarioid venations in *Tectaria*, or even between the free and the anastomosing venations. From the facts observed above, it may be concluded that the infrageneric affinity in *Tectaria* should be traced by other characteristics than venation, though the pattern of venation is in itself useful to define the difference between species.

References

- 1) Ching, R. C.: Bull. Fan Mem. Inst. Biol. 8: 304 (1938), in Tard. & C. Chr., Not. Syst. 7: 86 (1938).
- 2) Iwatsuki, K.: Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, B, 31: 21 (1964).
- 3) —: Acta Phytotax. Geobot. 18: 45 (1959).
- 4) —: *Ibid.*, 20: 219 (1962).

* * * *

ナナバケシダ属の種類群の類縁を論じる際、脈理の様式が重要な指標形質として取り上げられることがある。そこで、この属にみられる網状脈のうちで、網目が主脈と小脈との二重構造になっている drynarioid venation と、大きさに差はあってもすべての網目が平面的に配列されている sagenioid venation とを比較してみた。それぞれの葉脈が個体発生の初期段階でどんな変化をするか跡づけてみると、drynarioid venation の二重構造は脈の分岐が進むことから二次的に構成されるもので、葉面の分岐が浅くて網目の作られる面が広いものによくみかけられるものであることが分かった。この事実を他の形質群の比較から得た推論と照らし合わせてみると、ナナバケシダ属では、脈理の様式の差は系統的な差を示唆しているものではなくて、葉面の分岐の多様化に導びかれて分化してきたものであることが推定でき、いろいろの種類群で平行的に表われたものだから、種差を定義する形質としては有効であるが、系統を指標する形質とはなり得ないものであると結論される。

○地衣類思い出話 (11) (富樫 誠) Makoto TOGASHI: Miscellaneous notes on lichens or lichenological survey (11)

Stereocaulon depreaultii Del. と云う地衣のタイプローカリティーは Newfoundland で、その syntype 標本が偶然朝比奈先生のハーバリウムにありその日附は 1828 年とある。昭和29年と30年に信州北佐久郡白樺湖畔で小生が採集したものがよく似て居るので、先生が之を Dr. Mackenzie Lamb に送って見て貰った処、正に *S. depreaultii* に違いなく世界第二の産地となった。あとで先生のハーバリウムをよく調べたら、自分が昭和9年に佐渡の金北山で同一種を採集し、又昭和31年には室井緯氏が陸中姫上山で採集して居るので、本種は北日本には稀ではないと思う。